

ただ恵みのゆえに～大男ザアカイの思い出

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

登場人物

佐々木学

姉 佐々木友子

父 佐々木正明

いとこ 山本巖

巖の姉 山本のぞみ

巖の父 山本弘

巖の母 山本京子

力丸

ナレーター(大人の佐々木学)

< 前編 >

巖 おーい、学 ！

友子 あ、学、巖ちゃんだ。

学・友子 おーい、おーい。

巖 (駆け寄ってきて)学、友子、久しぶり。おじさん、こんにちは。

正明 やあ、巖君。大きくなったね。今何年生だっけ？

巖 4年生です。のぞみ姉ちゃんは高一。

正明 そうか、もうそんなになるか。学と友子のこと、よろしく頼むね。

N 父がそう言ったとき、わたしは両親と別れる寂しさと、仲良しのいとこと暮らす田舎の生活への期待で、複雑な気持ちになったのを覚えている。

わたしは佐々木学。あれは小学5年生の春だった。体の弱かった母が結核になり、東京の病院に入院した。わたしと姉の友子は、福島の伯父の家に預けられることになった。伯父の弘は、30人程の小さなキリスト教会の牧師をしていた。わたしはそこで、生涯忘れられない男に出会ったのだった。

正明 それじゃあ。これで。汽車の時間もあるし。

京子 節子にくれぐれもよろしくね。早く良くなるように祈ってますからって。

正明 伝えます。じゃ、学も友子も、いい子にしてるんだぞ。また来るからな。

N 夕暮れの坂道を降りていく父の後ろ姿を眺めているうちに、わたしは急に心細くなってきた。姉に涙を見られたくなくて、わたしは家の裏の大きないちじくの木に隠れた。

学 (ベソかきで)お父さん...お母さん...ううう。

N その時だった。

力丸 何だあ、男が泣いてんのかあ？

N 突然木から飛び降りてきたのは、背の高い男だった。

学 だれ？

N 男は全く奇妙だった。色のさめた作業着を着込んで、大きな足にぞうりを履いていた。ぼうぼうと突っ立った髪には白いものが混じっているが、日に焼けた顔にギョロ目、骨組みのしっかりした体は頑丈そうだ。そのアンバランスが、若いんだか年寄りなのか分からなくしていた。

学 何してたの、木の上で？

力丸 山見てたんだよ。吾妻小富士。ふああああ(大あくび)
京子 (家の中から)学ちゃん、ごはんよー
力丸 おっ、うまそうなおい。

N 驚いたことに、男はわたしと一緒に伯母の家に入ってきた。さらに恐れ入ったことには、男は夕食でどんぶり飯を3杯もお代わりしたのだった。

学 巖、あのおじさん、名前なんて言うの？

N その夜、巖とまくらを並べて寝ながらわたしは尋ねた。

巖 力丸さんだよ。

学 力丸？ それ、名前？ 苗字？

巖 分かんねえ。でもみんなそう呼んでるよ。

N 巖の話では、力丸というその男は1年ほど前、教会の集会にふらりと現れて以来、時々家にやってきては力仕事を手伝ったり、教会の案内のちらし配りをしたりしているという。

学 お仕事してないの？

巖 父さんが仕事紹介するんだけど、すぐやめちゃうんだよ。

学 本当はすごい年寄りとか。

巖 年はなぞなんだ。でも、戦争に行ってたんだって。足に弾がかすった跡があるんだ。こないだ、見せてくれた。

学 へえー。

N 何となく面白くなかった。せっかく楽しい日々が始まると思ったのに、力丸さんのせいで出鼻をくじかれた感じた。泣いているところを見られたのも恥ずかしかった。

モノ 何だい、変なおじさん。あんなの、無視だ。

N 日曜日の午前中は、伯父が牧師をしている教会の礼拝に出席する。一番後ろの席に、力丸さんも座っていた。

(BGM 賛美歌)

友子 (ささやき) ねえ学、あのおじさんも神様信じてるの？

学 (ささやき) 教会来てるからそうだよ。

N でも、どう見ても力丸さんはクリスチャンという感じじゃない。優しくてまじめな弘伯父さんや教会の人とは、全然違う。

弘 (説教) そのザアカイという男は、背が低かったので、そばにあったいちじくの木に登りました。イエス様をどうしても見たかったんですね。いい大人が木に登ってまで、それほどイエス様を求めていたのです…。

モノ いちじくの木かあ…。じゃ、力丸さんは“大男のザアカイ”だな。

N そう思いながらそっと振り向くと、力丸さんは口を開けて眠りこけていた。子供の時の日々は何て早く過ぎ去るのだろうか。わたしたちはたちまち福島福島の生活に慣れ、学校にも慣れた。

巖 卵焼きは絶対入れてよ、絶対。

京子 はいはい。

友子 ねえお姉ちゃん、今度わたしにもクッキーの作り方教えて。

のぞみ いいわよ。はい、一人4個ずつね。

N 秋のある晴れた土曜日、子供たちだけでピクニックに行くことになった。ノ

り巻きと、のぞみお姉ちゃんの作ったおいしそうなクッキーとをリュックに詰めていると、力丸さんがついていくと言い出した。

巖 (京子に)嫌だよ、一緒になんか行きたくないよ。

京子 何言ってるの。仲良くなさい。(力丸に)ほんと、すみませんね。子供たちのお守りさせちゃって…。

力丸 いやあ、いいですよ。今日はちょっと、みんな連れて遠出してみようと思ってね。

巖 (学に)別にいつもの公園でいいんだけどな…

学 (巖に)クッキー分け前減っちゃうね。

アナ (SE・ガチャン!)各場いっせいにスタートしました。外からヒメノシラユキ飛び出した、1馬身差で追うのはタケセイコー…。

N 驚いたことに、力丸さんに連れていかれたのは競馬場だった。

力丸 当てたら、教会にたくさん献金してやるからな。

N お弁当を食べ終わった力丸さんは馬券売り場の方に行ってしまった。残されたわたしたちは、走る馬を眺めたり、芝生でかけっこをしたりして遊んだ。

…いつの間にか日が傾きかけてきたころだった。

友子 あ、力丸さん、戻ってきた。

N 見ると、とぼとぼと力丸さんが歩いてくる。

力丸 ああ、ちくしょ。今日はまったくツイてねえや。帰ろ、帰ろ。

巖 帰る前にクッキー食べようよ。

力丸 クッキー？ ああ、あれな、置いといたら、カラスが来て持ってっちゃったんだよ。悪かったなあ。

皆(口々に)ええー？

うそだー

楽しみにしてたのにー

力丸 いや、本当だってば。

N そういう力丸さんの口の回りには、点々とクッキーの粉らしきものが付いていた。

巖 チクショウ、力丸め。絶対許さない。

友子 悪い言葉は神様が悲しむって、伯父さん言ってたよ。

巖 いいんだ、あいつには。あいつ、神様信じてるふりしてるだけなんだから。

学 そうだよ。伯父さんたちが優しくしてるのにひどいよ。

巖 やっつけてやろうぜ。

学 どうやって？

巖 おれにいい考えがあるんだ。いいか、秘密だぞ。

学 うん。

N わたしたちの大事なクッキーを食べた力丸さんに復讐^{ふくしゅう}する機会は、それからしばらくしてやってきた。

< 後編 >

巖 力丸め、仕事しないで、ご飯ばかり食べに来て。
学 そうだよ、ずるいよ。僕たちのクッキーまで取っちゃってさ。
巖 あんなやつ、絶対やっつけてやる。

N わたしは佐々木学。小学生の時、いとこの巖の家で奇妙な男に出会った。
くたびれた作業着を着込んで白髪混じりのぼうぼう頭、ぞうりを履いた年
齢不詳の大男。それが力丸さんだった。キリスト教会の牧師をしている伯
父の家に上がり込んで、お茶を飲んだり昼寝をしたり、教会の礼拝中
に人目をはばからず居眠りしたりする。そんな風来坊なのだ。

学 巖ちゃん、やっつけるって、どうするの？
巖 家の裏に物置があるだろ。あそこに閉じ込めんだよ。
学 でも、どうやって。
巖 いい考えがあるんだ。友子姉ちゃんも協力しろよ。
友子 ええ、あたしも？
巖 作戦会議だ。いいか、秘密だぞ。
学 うん。

N 作戦実行は、伯父の弘が留守にしたある昼下がりにあった。力丸さんは、
いつものようにいちじくの木に登って、まんじゅうを食べていた。

巖 大変だ、友子姉ちゃんが手挟んで取れなくなった。
学 力丸さん、助けて。
力丸 何だって？

N 木から飛び降りた力丸さんを、わたしたちは物置の前に連れていった。

力丸 どこだい、友ちゃんは。

巖 物置の中だよ。早く、早く。

力丸 暗くて見えねえなあ。

巖 今だ！

SE (ボタン！)

力丸 あ、何すんだ、(ドンドン)おい、開ける、こら、開けるって。

二人 やったあ！ 大成功！

N わたしたちは、まんまと力丸さんを物置に閉じ込めたのだった。
そしてその夜。

京子 ...このお食事を感謝して頂きます。アーメン。(口々に「アーメン」「頂きま
ーす」)

のぞみ あれっ、力丸さんは？

京子 さっきまでいたのにね。帰ったのかしら。

のぞみ お珍し。でも、いいけど。あの人、「居候三杯目にも堂々と」だもん。

京子 のぞみ、失礼なこと言うもんじゃありません。あの方はかわいそうな人な
のよ。戦争から命からがら帰ってきて、ご家族の行方だっけいまだに分か
らないんだから....。

N わたしと巖は黙々と食事をしながら、顔を見合わせてほくそ笑んだ。その
時。

弘 巖、学、出てきなさい。友子もだ。

N 庭の方から珍しくも伯父の大きな声が聞こえた。外に出てみると、伯父がホコリまみれの力丸さんと立っている。

弘 物置の前をお父さんが通りかかったら、どンドン音がするじゃないか。戸を開けてみたら、力丸さんが閉じ込められていた。一体、どういうことなんだ!?

友子 ...ご、ごめんなさい...(しくしく泣き始める)

学 ばか、泣くな、姉ちゃん。

友子 だって...

弘 巖。

巖 だって、力丸さんにおれたちは迷惑しているんだ。

学 そうです。競馬場に連れていかれたり、僕たちの分までクッキー食べられたり、大迷惑です。

弘 だからって、力丸さんを閉じ込めていいのか？ それは神様に喜ばれることなのか？

学 それは...喜ばれることじゃない...けど...。

巖 父さん、父さんだって、迷惑してるんだろ。力丸さんはうちに来てただ飯食って好き勝手してるし、仕事すぐ辞めちゃうし、礼拝の時だって居眠りばかりしてるし。

弘 それから？

巖 教会の掃除だってサボるし...。

弘 それから？

巖 神様信じてるなんて、うそに決まってる！！

力丸 う、うそじゃねえ！！

巖 うそだ！

力丸 う...うそじゃ、ねえ。

学 力丸さん...

力丸 お...おれ、神様信じて立派にやろうと思っちゃいるんだ。だけど、仕事やっても、続かねえし...。ありがたい聖書のお言葉も、聞いているうちに眠くなっちゃうし...。何かうまくいなくて、つい競馬行ったりしちゃうんだ...。いっつも、これっきりでやめようって思ってたけど...。おれみてえな...おれみてえな頭悪いやつは、やっぱりダメかなあって、何か情けねくて、神様だっておれみたいのは見捨てるんじゃねえかなって...

巖 力丸さん...

力丸 牧師先生や奥さんが親切にしてくれるもんで、つつい甘えて、おれ...。す、すまねえな、迷惑かけちまって...

N そう言うと、力丸さんはうなだれながら出ていった。大男の力丸さんが、その時だけは小さく見えた。
伯父さんは力丸さんを見送ると、そっとため息をついた。

弘 なあ、巖。お前、力丸さんのこと怠けてるとかずるいとか言ってるけど、お前だって、家の手伝いしなかったり勉強サボったりするんじゃないか？

巖 そ、それとこれとは別だよ。

弘 別じゃあないよ。お父さんだって同じだ。心の中では怠けたい気持ちがある。ただ力丸さんのように、行動に出ないだけなんだ...。聖い神様の前じゃ、人はみんな同じなんだ。だれも、完全に立派な人なんていないんだよ。

学 そうなの？ じゃあ、みんな天国に行けないの？

弘 いや、そうじゃない。イエス様を信じるなら、それで天国に行けるんだ。

友子 イエス様を信じるだけでいいの？

弘 そうだよ。聖書にはね、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって、救われたのです。行いによるものではありません。」って書いてあるんだ。天国に行けるのは、その人が立派だからじゃない。それは、神様が下さるお恵みなんだ。

友子 お恵み...？

弘 そうだ。力丸さんは、自分は天国に行けるような立派な人間じゃないって思っている。自分じゃ何もできないって知っている。それが大事なことなんだ。そうは思わないかい、巖？

巖 ...思うけど...

弘 イエス様を信じるってというのはね、そんなどうしようもない自分を救ってくださるのはイエス様しかいないって、信じることなんだよ。分かるかい？

巖 ...うん、まあね。

弘 学はどうだ？

巖 ...はい。

弘 さ、早く力丸さんと呼んできなさい。夕ご飯が冷めちゃうぞ。

皆 (てんでに)「はーい」「力丸さーん、ごはんー」

N 力丸さんはいつものように、いちじくの木に登っていた。やっぱり大男のザアカイだ。

友子 力丸さん、降りてよ。ご飯、一緒に食べようよ。

N 力丸さんは黙って山を見ていた。一向に降りてきそうにない。わたしたちは仕方なく木に登り、太い枝に並んでまたがった。

学 いっつも山見てるけど、飽きない？

力丸 飽きねえな。春先になると、吾妻小富士の山肌に雪が残って、うさぎみたいな形になるんだ。

友子 うさぎ？ 見たいなあ、友子も。

N 山陰にオレンジ色の夕日が沈もうとしていた。ところどころ金色に染まった雲が、まるで天国の入り口のようにだった。わたしたちは一緒に足をぶらぶらさせながら、神様が見つけた美しい景色をいつまでも眺めていた…。あれから20年以上たった今でも、わたしはあの奇妙な「大男のザアカイ」のことを懐かしく思い出す。あの日、「わたしも神様の前に何も誇れる人間ではない」と気付かせてくれた力丸さん。程なくわたしは、牧師の弘伯父さんが教えてくれた「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。」という聖書の言葉によって、イエス・キリストを信じた。わたしと姉が東京に戻った後、力丸さんは漁師になると行って石巻に行ったが、何年かして、津軽沖で乗った船が遭難したという話を聞いた。何でも、シケで海にほうり出された年寄りの漁師を、自分も海に飛び込んで何とか海面に引き上げ、力尽きて波にのまれたという。わたしたちといた時は、何一つ立派なことはしなかった力丸さんだが、この聖書の言葉は、あの人にも本当だったのだ。

< 完 >